

大学生におけるAD/HD的行動傾向と 大学生生活適応感との関連について

0807051

坂口 実士

【目的】

発達障害の1つであるAD/HD(注意欠如多動性障害)は長い間、子ども特有の障害であり成人期のAD/HDは存在しないとみなされていた。しかし、多くの研究の結果、成人してからも持続することが分かってきた。そしていくつかの実態調査の結果によると、大学生の中にもAD/HDの者は存在することが明らかにされている。幼児・児童期のAD/HDに焦点が当てられ始めたのはここ数年であり、これまで関心を払われず、なんら教育的あるいは発達支援的な援助を受けなかった青年群が大学に入学し、社会的あるいは情緒的な困難を有している可能性は存在すると考えられる。

また、AD/HDの診断を受けていなくてもAD/HD的な行動特徴を持つ大学生も存在すると言われている。このような学生もまた、大学生活において様々な困難を抱えながら生活しているのではないかと考えられる。

そして、生活をする上で様々な生きづらさを感じやすい分、AD/HD傾向の者は自尊感情が低くなるのではないかと予想される。

そこで、本研究ではAD/HD的な行動傾向を持つ大学生は大学生活においてどのような側面で不適応を感じているのかを明らかにし、AD/HD傾向と大学生生活適応感測定尺度及び自尊感情との関連を検討し、加えてこれらは男女において違いがあるのかどうかを検討することを目的とする。

【方法】

2011年10月下旬から11月上旬にかけて、北海道内の4年制大学に所属する学生140名(男性36名、女性104名)に対し、質問紙による調査を行った。質問紙の内容は以下の通りである。

(1)大学生生活適応感測定尺度

(2)浅川・市橋(2007)が作成したAD/HD的行動傾向測定目録

(3)Mimura & Griffiths (2007)による日本語版 Rosenberg 自尊感情尺度

【結果と考察】

大学生生活適応感測定尺度の因子分析を行った結果、「教員・学業との関係」「部活動・サークルとの関係」「家族・友人との関係」「メンタルヘルス」の4つの因子が抽出された。そしてこの4つの下位尺度がAD/HD的行動傾向得点に及ぼす影響を調べるために、AD/HD的行動傾向得点を従属変数、4つの下位尺度を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、「メンタルヘルス」がAD/HD的行動傾向得点に影響を及ぼしていることが分かった。

次に、AD/HD傾向の強さによって大学生生活適応感に違いがあるのかを調べるために、AD/HD的行動傾向得点をHigh群とLow群に分け、4つの下位尺度及び自尊感情尺度について分散分析を行った。その結果、「メンタルヘルス」と「自尊感情」において有意な差が見られた。

また、男女別に得点に差があるかを検討してみたが、有意な結果は見られなかった。

以上の結果から、AD/HD的行動傾向に影響を及ぼすものは「メンタルヘルス」であることが分かった。つまり、心の不健康な人はAD/HD的な行動を取りやすいということである。また、AD/HD的行動傾向得点が高い人ほど自尊感情が低いことも明らかになった。

そしてこのことから、AD/HD傾向の学生に対してメンタル面においてサポートを行うことと、自尊感情を高める支援を行う必要性があると考えられる。

最後に、本研究では「メンタルヘルス」に影響を及ぼすものは明らかにすることができなかった。それを明らかにすることで、より不適応感を解決することができるのではないかと考え、これを今後の課題とする。

(指導教員 豊村 和真 教授)